

2019 年度  
関西福祉科学大学大学院  
社会福祉学研究科  
心理臨床学専攻

修士論文題目

大学生の死生観及び自己肯定感に  
影響を与える愛他行動について

指導教員（ 柏木 雄次郎 ）

社会福祉学研究科心理臨床学専攻

学生番号 11820007 氏名 安井 和希

## I. 問題と目的

日本は豊かな経済力や医療、公衆衛生の進歩を背景に世界一の長寿国となった一方で世相に目を向けると、青少年の凶悪犯罪の増加や諸外国に比べて非常に高い自殺率などが大きな問題になっている（大石・安川・濁川・飯田，2007）。警察庁によると、2018年度の自殺者の総数は20,840人であり、そのうち大学生の自殺者は336人となっている。全体の1.61%と少ない割合ではあるが、大学生が自ら命を絶っていることは看過してはならない事実である。また、2018年に日本財団が実施した第3回自殺意識調査では、18～22歳の若年層の男女平均で30%の人が「自殺念慮（本気で自殺したいと考えたことがあること）」を持ったことがあり、11%が「自殺未遂（自殺未遂経験があること）」の経験があると答えていることを明らかにした。

藤井（2003）は「大学生は自立を獲得していく中で人間関係の形成能力などに課題を持っているために、人によっては豊かなものにも孤独なものにもなりうる」、「青年期のアイデンティティの形成にとって、死生観は重要な役割を果たす」と述べており、ここで言う死生観とは「生きることと死ぬことについての考え方」である。海老根（2008）は死生観研究の意義として「我々が死をどのように捉え、生きることへと繋いでいるのかを理解するため、そして同時に、人々がより良く生きることを導く、質の高い教育や援助を行うために、死生観に関する研究を発展させることは重要である」と述べている。また、平井・坂口・安部・森川・柏木（2000）は「死後の世界観」、「死への恐怖・不安」、「解放としての死」、「死からの回避」、「人生における目的意識」、「死への関心」、「寿命観」の7因子からなる死生観尺度を開発した。「人生における目的意識」が含まれている点が、この尺度の特徴と言える。

大学生は「心理社会的モラトリアム（Erikson, 1959）」という言葉に代表されるように、自由に自ら学び、社会的な責任や義務もある程度猶予された立場にあり、また、ライフサイクルの段階としては青年期後期にあたり、学業、将来の生き方、職業の選択などの自分自身についての課題や、親からの自立、友人関係、異性との交流といった対人関係における課題に直面し、アイデンティティの確立が成されていく（高坂，2012）。大学生は学生生活の中で、どのような人間になりたいか試行錯誤をしながら探す時期であり、時には思い通りにならないことで生きる目的を失うこともあると考えられ、このような中で「人生における目的意識」に影響を与える要因を明らかにすることは重要であると考えられる（入江・岳田・古賀・藤村，2012）。また、生きる目的を失い自己喪失した大学生に期待することは、新たな目的に向かって再び挑戦することであり、その原動力となるのは自己肯定感であると考えられる（入江他，2012）。自己肯定感の定義として田中（2005）は、「自己に対して肯定的で、好ましく思うような態度や感情」としている。

愛他行動は「他人のためになることをしようとする自発的な行為で、内発的に動機付けられ、利己的な動機が含まれていない行動」と定義されている（二

宮, 2004)。村上・西村・櫻井 (2016) によると、「愛他的行動は、向社会的行動の1つのサブタイプで、向社会的行動のうち、社会的な報酬よりも自己の内化された道徳的価値観に基づいているものをいう (Eisenberg & Spinrad, 2014)」、「向社会的行動は、他者の利益を意図した行動であり、その結果として他者との気持ちのつながりを強め、それをより望ましいものにしようとする意味で、これら2つの用語は異なる概念であるとされている (Eisenberg, 1982; Eisenberg et al., 2006)」と述べている。しかし本研究では、愛他行動と向社会的行動を区別しないものとした。また、宮崎 (2013) の研究結果から「小さな親切大きなお世話」(愛他行動-不都合な結果) であっても、受け手はポジティブな方へ変化していたことが明らかにされた。このことから、愛他行動をされるとポジティブな感情を得られるため、自己肯定感が高まるのではないかと考えられる。また、受け手にとって悪い結果であってもポジティブな感情変化があることから、愛他行動をした場合にもポジティブな感情変化が得られ、自己肯定感が高まるのではないかと考えられる。自己肯定感が高まれば「人生における目的意識」を高め、自殺する大学生が減少すると考えられる。

以上のことから、死生観と自己肯定感、愛他行動は大いに関係していると考えられる。しかしこれまでの研究に、大学生の死生観及び自己肯定感に愛他行動がどのような影響を与えるのかを検討している論文は見当たらなかった。そこで、本研究では大学生の死生観及び自己肯定感に関して、愛他行動がどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とする。

作業仮説 (予想される結果) としては、①「愛他行動」を行うと「自己肯定感」が高まり、「人生における目的意識」が高くなると考えられる。②「死からの回避」が高くなると「自己肯定感」が高くなり、「人生における目的意識」が高くなると考えられる。③「死への恐怖・不安」が高くなると「自己肯定感」が低くなり、「人生における目的意識」が低くなると考えられる。④「死への関心」が高くなると「自己肯定感」が低くなり、「人生における目的意識」が低くなると考えられる。

## II. 方法

1. 調査時期 2019年4月に実施した。
2. 調査対象者 関西福祉科学大学の大学生 259名。このうち記入漏れなどを除いた 237名 (男子 123名、女子 114名) (社会福祉学科 23名、心理科学科 72名、健康科学科 11名、リハビリテーション学科 132名) を対象とした。平均年齢は 19.84歳 (SD=1.36) であった。
3. 調査材料
  - (1) フェイスシート：性別、年齢、学年、学科
  - (2) 自己肯定感尺度として自尊心測定尺度 (豊田・松本, 2004) を用いた。10項目で構成されており、全然そう思わない (1点)、あまりそう思わない (2点)、ややそう思う (3点)、とてもそう思う (4点) の4段階評定であった。

(3) 死生観尺度として臨老式死生観尺度(平井・坂口・安部・森川・柏木, 2000)を用いた。27項目で構成されており、評定方法は、全く当てはまらない(1点)、当てはまらない(2点)、やや当てはまらない(3点)、どちらとも言えない(4点)、やや当てはまる(5点)、当てはまる(6点)、非常に当てはまる(7点)の7段階評定であった。

(4) 愛他行動尺度として向社会的行動尺度:大学生版(菊池, 1988)を用いた。20項目で構成されており、したことがない(1点)、一回やった(2点)、数回やった(3点)、しばしばやった(4点)、もっとやった(5点)の5段階評定であった。

#### 4. 調査手続き

調査は大学の講義の時間を用いて行った。被調査者に調査への協力を求めるため、調査依頼、回答の注意を教示した後、質問紙を配布し回答を求めた。質問紙への回答時間は10分程度であった。

5. 統計ソフト: SPSS (Ver.24) を用いた。

### III. 結果

#### 1. 自己肯定感の因子分析

10項目からなる自尊心測定尺度(豊田・松本, 2004)を、主因子法による因子分析を行った。その結果を Table1 に示した。

Table1 自己肯定感の因子分析結果 (バリマックス回転後の因子負荷量)

	第1因子	第2因子	共通性
2 私は長所をたくさん持っている。	.844	.035	.713
6 私は自分を見込みのある人間だと見ている。	.725	.074	.530
1 私は少なくとも人並みに価値のある人間だと思う。	.666	.216	.490
4 私は物事を人並みにできる。	.570	.201	.365
7 自分にだいたい満足している。	.539	.263	.359
5 私は誇りに思っていることがあまりない。*	.468	.368	.354
10 自分はだめな人間だと思うことがときどきある。*	.362	.782	.742
9 自分は役立たずな人間だとときどき感じる。	.342	.712	.624
3 自分を失敗者だと感じるが多い。*	.318	.547	.400
8 自分をもっと尊敬できたらと思う。*	.103	-.496	.257
因子寄与	2.87	1.96	4.83
累積寄与率 (%)	28.72	48.34	

\* = 逆転項目 (4件法 1→4, 2→3, 3→2, 4→1)

因子分析の結果、2因子構造となった。因子の命名については、入江他(2012)を参考に、同じネーミングにした。第1因子は「私は長所をたくさん持っている。」、「私は自分を見込みのある人間だと見ている。」、「私は少なくとも人並み

に価値のある人間だと思う。」、「私は物事を人並みにできる。」、「自分にだいたい満足している。」、「私は誇りに思っていることがあまりない。」の6項目からなり、「自己有能肯定感」とした。第2因子は「私はだめな人間だと思ふことがときどきある。」、「自分は役立たずな人間だとときどき感じる。」、「自分を失敗者だと感じることが多い。」、「自分をもっと尊敬できたらと思う」の4項目からなり「自己無能否定感」とした。「自己無能否定感」とは“自分はだめなんかじゃない”という意味であり、自己有能肯定感の二重否定である(入江他, 2012)。因子寄与はそれぞれ 2.87、1.96、4.83 であり、累積寄与率は 48.34%であった。

## 2. 死生観の因子分析

27項目からなる臨老式死生観尺度(平井他, 2000)は、7因子によって構成されている。この中から「解放としての死」を除いた「死後の世界観」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「人生における目的意識」、「死への関心」、「寿命観」の6因子23項目を用いて、主因子法による因子分析を行った。その結果をTable2に示した。

「解放としての死」は「私は、死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている。」、「私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている。」、「死は痛みと苦しみからの解放である。」、「死は魂の解放をもたらしてくれる。」の4項目からなり、赤澤(2010)によると、「自殺は様々な悩みにより心理的に追い込まれた末の死であると言われており、死ぬしかない、死んで楽になりたいといった思考は、「解放としての死」の考え方と類似する部分があることが予想される」と述べており、また、入江他(2012)を参考に、「解放としての死」を除いた。

因子分析の結果、6因子構造となった。因子の命名については、平井他(2000)と同じネーミングにした。第1因子は「自分が死ぬことを考えると、不安になる。」、「死は恐ろしいものだと思う。」、「私は死を非常に恐れている。」、「死ぬことがこわい。」の4項目からなり、「死への恐怖・不安」とした。第2因子は「私は死についての考えが思い浮かんでくると、いつもはねのけようとする。」、「私は死について考えることを避けている。」、「どんなことをしても死を考えることを避けたい。」、「死は恐ろしいのであまり考えないようにしている。」の4項目からなり、「死からの回避」とした。第3因子は「死後の世界はあると思う。」、「世の中には「霊」や「たたり」があると思う。」、「死んでも魂は残ると思う。」、「人は死後、また生まれ変わると思う。」の4項目からなり、「死後の世界観」とした。第4因子は「私は人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある。」、「私の人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりとしている。」、「私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している。」、「未来は明るい。」の4項目からなり、「人生における目的意識」とした。第5因子は「寿命は最初から決まっていると思う。」、「人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う。」、「人の生死は見えない力(運命・神など)によって決められて

Table2 死生観の因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

	第 1 因 子	第 2 因 子	第 3 因 子	第 4 因 子	第 5 因 子	第 6 因 子	共 通 性
6 自分が死ぬことを考えると、不安になる。	.840	.208	.168	.178	.025	.109	.820
7 死は恐ろしいものだと思う。	.816	.261	.110	.135	.027	.067	.769
8 私は死を非常に恐れている。	.799	.373	.022	.095	-.009	.074	.793
5 死ぬことが怖い。	.769	.252	.184	.073	-.058	.027	.699
15 私は死についての考えが思い浮かんでく ると、いつもそれをはねのけようとする。	.250	.793	.088	.158	.042	.009	.725
13 私は死について考えることを避けている。	.176	.777	.019	.072	.020	-.029	.642
14 どんなことをしても死を考えることを避 けたい。	.232	.774	.071	.131	.028	.026	.676
16 死は恐ろしいのであまり考えないように している。	.342	.717	-.033	.169	-.011	-.090	.668
1 死後の世界はあると思う。	.126	.055	.791	.165	.065	.136	.695
2 世の中には「霊」や「たたり」があると思 う。	.031	.049	.776	.069	.223	.081	.666
3 死んでも魂は残ると思う。	.117	.027	.691	.126	.274	.174	.613
4 人は死後、また生まれ変わると思う。	.135	.016	.647	.143	.061	.082	.467
18 私は人生の意義、目的、使命を見出す能力 が十分にある。	.032	.103	.103	.859	.005	.078	.765
19 私の人生について考えると、今ここに生き ている理由がはっきりとしている。	.115	.187	.043	.818	-.021	-.013	.720
17 私は人生にはっきりとした使命と目的を 見出している。	.157	.164	.108	.719	-.056	.143	.604
20 未来は明るい。	.098	.030	.206	.520	.020	-.089	.331
26 寿命は最初から決まっていると思う。	-.028	-.019	.177	-.024	.916	.172	.901
25 人の寿命はあらかじめ「決められている」 と思う。	-.014	.001	.174	-.004	.882	.179	.841
27 人の生死は目に見えない力（運命・神など） によって決められている。	.027	.096	.276	-.054	.624	.238	.536
22 自分の死について考えることがよくある。	.066	-.065	.187	-.070	.069	.846	.769
21 「死とは何だろう」とよく考える。	.103	.025	.362	-.037	.097	.716	.666
23 身近な人の死をよく考える。	.084	-.038	.043	.134	.186	.572	.390
24 家族や友人と死についてよく話す。	-.024	.021	-.026	.034	.240	.367	.195
因子寄与	2.99	2.75	2.59	2.43	2.26	1.94	14.96
累積寄与率（%）	12.99	24.96	36.20	46.78	56.59	65.01	

いる。」の3項目からなり、「寿命観」とした。第6因子は「自分の死について考えることがよくある。」「死とは何だろう」とよく考える。」「身近な人の死をよく考える。」「家族や友人と死についてよく話す。」の4項目からなり、「死への関心」とした。因子寄与はそれぞれ2.99、2.75、2.59、2.43、2.26、1.94、14.96であり、累積寄与率は65.01%であった。

### 3. 愛他行動の因子分析

20項目からなる向社会的行動尺度：大学生版（菊池，1998）を、主因子法による因子分析を行った。その結果をTable3に示した。

Table3 愛他行動の因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

	第1因子	共通性
5 気持ちの悪くなった友人を、保健室などにつれていく。	.704	.496
3 転んだ子どもを起こしてあげる。	.666	.444
15 見知らぬ人がハンカチなどを落としたとき、教えてあげる。	.646	.417
18 知らない人が落として散らばった荷物を、いっしょに集めてあげる。	.637	.405
9 何か探している人には、こちらから声をかける。	.629	.396
20 自動販売機や切符売機などの使い方を教えてあげる。	.607	.368
12 雨降りのとき、あまり親しくない友人でもカサに入れてあげる。	.596	.355
19 けが人や急病人が出たとき介抱したり救急車を呼んだりする。	.573	.328
16 知らない人に頼まれてシャッターを押してあげる。	.548	.301
10 バスや列車で立っている人に席をゆずる。	.548	.300
17 バスや列車で、荷物を網棚にのせてあげる。	.513	.263
2 お店で、渡されたおつりが多いとき、注意してあげる。	.483	.234
8 気持ちの落ち込んだ友人にデンワしたり、手紙を出したりする。	.469	.220
11 酒に酔った友人の世話をする。	.442	.195
13 授業を休んだ友人のためにプリントをもらう。	.438	.192
6 友人のレポート作成や宿題を手伝う。	.436	.190
4 あまり親しくない友人にもノートを貸す。	.428	.183
1 列に並んでいて、急いでいる人のために順番をゆずる。	.408	.167
14 家族の誕生日や母の日などに家にデンワをしたりプレゼントをしたりする。	.405	.164
7 列車などで相席になったお年寄りの話し相手になる。	.377	.142
因子寄与	5.76	5.76
累積寄与率 (%)	28.80	

因子分析の結果、固有値の減少量を考慮し、また、菊池（1988）を参考にし、1因子とした。因子の命名は「愛他行動」とした。因子寄与はいずれも5.76

であり、累積寄与率は 28.80%であった。

#### 4. 下位尺度得点と相関

##### (1) 平均値と標準偏差

「自己肯定感」、「死生観」、「愛他行動」における全体の下位尺度得点の平均値と標準偏差の結果を Table4 に示した。

Table4 全体の下位尺度得点の平均値と標準偏差の結果

	平均値	標準偏差
自己有能肯定感	2.40	0.56
自己無能否定感	1.58	0.32
死への恐怖・不安	4.25	1.83
死からの回避	3.34	1.38
死後の世界観	3.14	1.43
人生における目的意識	4.33	1.52
寿命観	3.64	1.29
死への関心	3.40	1.74
愛他行動	2.55	0.68

「自己有能肯定感」の平均値は 2.40、標準偏差は 0.56 であった。「自己無能否定感」の平均値は 1.58、標準偏差は 0.32 であった。「死への恐怖・不安」の平均値は 4.25、標準偏差は 1.83 であった。「死からの回避」の平均値は 3.34、標準偏差は 1.38 であった。「死後の世界観」の平均値は 3.14、標準偏差は 1.43 であった。「人生における目的意識」の平均値は 4.33、標準偏差は 1.52 であった。「寿命観」の平均値は 3.64、標準偏差は 1.29 であった。「死への関心」の平均値は 3.40、標準偏差は 1.74 であった。「愛他行動」の平均値は 2.55、標準偏差は 0.68 であった。

##### (2) 相関関係

「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「寿命観」、「死への関心」、「愛他行動」について相関関係を分析した結果を Table5 に示した。

「自己有能肯定感」について、「自己無能否定感」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「愛他行動」と正の相関がみられた。

「自己無能否定感」について、「自己有能肯定感」、「死への恐怖・不安」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「愛他行動」と正の相関がみられた。

「死への恐怖・不安」について、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死からの回避」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「死への関心」と正の相関がみられた。



Table5 自己肯定感、死生観、愛他行動の相関係数

	自己有能 肯定感	自己無能 否定感	死への恐 怖・不安	死からの 回避	死後の世 界観	人生にお ける目的 意識	寿命観	死への関 心	愛他行動
自己有能 肯定感	1	.59**	.18**	.11	.20**	.58**	.00	-.01	.16*
自己無能 否定感		1	.18**	.10	.16*	.51**	-.01	-.08	.15*
死への恐 怖・不安			1	.55**	.27**	.29**	.04	.16*	.05
死からの 回避				1	.13*	.31**	.04	-.00	-.05
死後の世 界観					1	.28**	.39**	.34**	-.17**
人生にお ける目的 意識						1	.00	.08	.10
寿命観							1	.39**	.06
死への関 心								1	.14*
愛他行動									1

\*p<.05, \*\*p<.01 (n=237)

「死からの回避」について、「死への恐怖・不安」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」と正の相関がみられた。

「死後の世界観」について、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「人生における目的意識」、「寿命観」、「死への関心」と正の相関がみられ、「愛他行動」と負の相関がみられた。

「人生における目的意識」について、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死後の世界観」と正の相関がみられた。

「寿命観」について、「死後の世界観」、「死への関心」と正の相関がみられた。

「死への関心」について、「死への恐怖・不安」、「死後の世界観」、「寿命観」、「愛他行動」と正の相関がみられた。

「愛他行動」について、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への関心」と正の相関がみられ、「死後の世界観」と負の相関がみられた。

## 5. 下位尺度得点の性差と相関

### (1) 性差

性差を見るため t 検定を行った。「自己肯定感」、「死生観」、「愛他行動」における男女別の下位尺度得点の平均値と標準偏差、t 検定の結果を Table6 に示した。

Table6 男女別下位尺度得点の平均値と標準偏差、t 検定の結果

	男子 (n=123)		女子 (n=114)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
自己有能肯定感	2.55	0.55	2.26	0.54	3.97**
自己無能否定感	1.61	0.32	1.56	0.32	1.26
死への恐怖・不安	4.49	1.87	4.01	1.77	2.04*
死からの回避	3.32	1.56	2.96	1.26	1.98*
死後の世界観	4.12	1.67	4.58	1.32	2.36*
人生における目的意識	3.82	1.40	3.47	1.14	2.13*
寿命観	3.14	1.83	3.68	1.61	2.41*
死への関心	3.30	1.52	3.40	1.22	0.54
愛他行動	2.51	0.78	2.61	0.53	1.13

\*p<.05, \*\*p<.01

「自己有能肯定感」の得点の男子の平均値は 2.55、標準偏差は 0.55 であり、女子の平均値は 2.26、標準偏差は 0.54 であった。2 つの平均値の間に有意な差が認められた ( $t(235)=3.94, p<.01$ )。「自己無能否定感」の得点の男子の平均値は 1.61、標準偏差は 0.32 であり、女子の平均値は 1.56、標準偏差は 0.32 であった。2 つの平均値の間に有意な差は認められなかった。「死への恐怖・不安」の得点の男子の平均値は 4.49、標準偏差は 1.87 であり、女子の平均値は 4.01、標準偏差は 1.77 であった。2 つの平均値の間に有意な差が認められた ( $t(235)=2.04, p<.05$ )。「死からの回避」の得点の男子の平均値は 3.32、標準偏差は 1.56 であり、女子の平均値は 2.96、標準偏差は 1.26 であった。2 つの平均値の間に有意な差が認められた ( $t(231)=1.98, p<.05$ )。「死後の世界観」の得点の男子の平均値は 4.12、標準偏差は 1.67 であり、女子の平均値は 4.58、標準偏差は 1.32 であった。2 つの平均値の間に有意な差が認められた ( $t(230)=2.36, p<.05$ )。「人生における目的意識」の得点の男子の平均値は 3.82、標準偏差は 1.40 であり、女子の平均値は 3.47、標準偏差は 1.14 であった。2 つの平均値の間に有意な差が認められた ( $t(235)=2.13, p<.05$ )。「寿命観」の得点の男子の平均値は 3.14、標準偏差は 1.83、女子の平均値は 3.68、標準偏差は 1.61 であった。2 つの平均値の間に有意な差が認められた ( $t(234)=2.41, p<.05$ )。「死への関心」の得点の男子の平均値は 3.30、標準偏差は 1.52、女子の平均値は 3.40、標準偏差は 1.22 であった。2 つの平均値の間に有意な差は認められな

かった。「愛他行動」の得点の男子の平均値は 2.51、標準偏差 0.78、女子の平均値は 2.61、標準偏差は 0.53 であった。2 つの平均値の間に有意な差は認められなかった。

## (2) 相関関係

「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「寿命観」、「死への関心」、「愛他行動」について、男女別の相関関係を分析した結果を Table7 に示した。

Table7 男女別自己肯定感、死生観、愛他行動の相関係数

	自己有能肯定感	自己無能否定感	死への恐怖・不安	死からの回避	死後の世界観	人生における目的意識	寿命観	死への関心	愛他行動
自己有能肯定感	1	.49**	.19*	.09	.22*	.52**	.02	-.10	.23*
自己無能否定感	.70**	1	.16	.10	.16	.46**	-.00	-.08	.18
死への恐怖・不安	.11	.20*	1	.50**	.37**	.37**	.16	.25**	.08
死からの回避	.07	.09	.61**	1	.12	.39**	.16	.00	-.03
死後の世界観	.29**	.19*	.19*	.21*	1	.39**	.42**	.45**	.19*
人生における目的意識	.63**	.58**	.17	.15	.16	1	.19*	.19*	.19*
寿命観	.07	.01	-.06	-.09	.33**	-.22*	1	.38**	.09
死への関心	-.00	-.07	.04	.00	.16	-.10	.42**	1	.17
愛他行動	.13	.12	.04	-.06	.11	-.01	-.01	.08	1

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$  上部=男子 (n=123), 下部=女子 (n=114)

「自己有能肯定感」について、男子では「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「愛他行動」と正の相関がみられた。女子では「自己無能否定感」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「自己有能肯定感」について、男子では「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「愛他行動」と正の相関がみ

られた。女子では「自己無能否定感」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」と正の相関がみられた。

「自己無能否定感」について、男子では「自己有能肯定感」、「人生における目的意識」と正の相関がみられた。女子では「自己有能肯定感」、「死への恐怖・不安」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」と正の相関がみられた。

「死への恐怖・不安」について、男子では「自己有能肯定感」、「死からの回避」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「死への関心」と正の相関がみられた。女子では「自己無能否定感」、「死からの回避」、「死後の世界観」と正の相関がみられた。

「死からの回避」について、男子では「死への恐怖・不安」、「人生における目的意識」と正の相関がみられた。女子では「死への恐怖・不安」、「死後の世界観」と正の相関がみられた。

「死後の世界観」について、男子では「自己有能肯定感」、「死への恐怖・不安」、「人生における目的意識」、「寿命観」、「死への関心」、「愛他行動」と正の相関がみられた。女子では「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」と正の相関がみられた。

「人生における目的意識」について、男子では「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死後の世界観」、「寿命観」、「死への関心」、「愛他行動」と正の相関がみられた。女子では「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「寿命観」と正の相関がみられた。

「寿命観」について、男子では「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「死への関心」と正の相関がみられた。女子では「死後の世界観」、「死への関心」と正の相関がみられ、「人生における目的意識」と負の相関がみられた。

「死への関心」について、男子では「死への恐怖・不安」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「寿命観」と正の相関があった。女子では「寿命観」と正の相関がみられた。

「愛他行動」について、男子では「自己有能肯定感」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」と正の相関がみられた。女子では相関関係はみられなかった。

## 6. 下位尺度得点の学科別の差と相関

### (1) 学科別の差

学科別の差を見るため一元配置の分散分析を行った。「自己肯定感」、「死生観」、「愛他行動」における学科別の一元配置の分散分析の結果を Table8 に示した。

「自己有能肯定感」の得点の社会福祉学科の平均値は 2.60、標準偏差は 0.66 であった。心理科学科の平均値は 2.33、標準偏差は 0.59 であった。健康科学科の平均値は 2.06、標準偏差は 0.48 であった。リハビリテーション学科の平均値は 2.45、標準偏差は 0.53 であった。4つの平均値の間に有意な差が認めら

Table8 学科別下位尺度得点の平均値と標準偏差、一元配置の分散分析の結果

	社会福祉学科 (n=23)		心理科学科 (n=71)		健康科学科 (n=11)		リハビリテーション 学科 (n=132)		F 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
	自己有能 肯定感	2.60	0.66	2.33	0.59	2.06	0.48	2.45	
自己無能 否定感	1.58	0.38	1.54	0.33	1.51	0.41	1.62	0.30	1.00
死への恐 怖・不安	4.80	1.48	4.15	1.91	3.80	2.06	4.27	1.83	1.00
死からの 回避	3.39	1.27	3.02	1.47	2.75	1.42	3.20	1.44	0.76
死後の世 界観	4.57	1.62	4.46	1.52	3.93	1.85	4.27	1.49	0.67
人生にお ける目的 意識	3.78	1.49	3.39	1.24	3.16	1.27	3.81	1.26	2.30
寿命観	3.67	1.63	3.72	1.70	4.12	2.05	3.13	1.73	2.74*
死への関 心	3.28	1.43	3.54	1.20	2.98	1.70	3.28	1.44	0.82
愛他行動	2.51	0.54	2.49	0.67	2.69	0.73	2.60	0.72	0.56

\*p<.05

れた ( $F(3,233)=3.12, p<.05$ )。続いて、Tukey法 (TukeyのHSD法) による多重比較の結果、社会福祉学科と健康科学科の平均値の差は有意水準 5%で有意な差が認められた。「自己無能否定感」の得点の社会福祉学科の平均値は 1.58、標準偏差は 0.38であった。心理科学科の平均値は 1.54、標準偏差は 0.33であった。健康科学科の平均値は 1.51、標準偏差は 0.41であった。リハビリテーション学科の平均値は 1.62、標準偏差は 0.30であった。4つの平均値の間に有意な差は認められなかった。「死への恐怖・不安」の得点の社会福祉学科の平均値は 4.80、標準偏差は 1.48であった。心理科学科の平均値は 4.15、標準偏差は 1.91であった。健康科学科の平均値は 3.80、標準偏差は 2.06であった。リハビリテーション学科の平均値は 4.27、標準偏差は 1.83であった。4つの平均値の間に有意な差は認められなかった。「死からの回避」の得点の社会福祉学科の平均値は 3.39、標準偏差は 1.27であった。心理科学科の平均値は 3.02、標準偏差は 1.47であった。健康科学科の平均値は 2.75、標準偏差は 1.42であっ

た。リハビリテーション学科の平均値は 3.20、標準偏差は 1.44 であった。4 つの平均値の間に有意な差は認められなかった。「死後の世界観」の得点の社会福祉学科の平均値は 4.57、標準偏差は 1.62 であった。心理科学科の平均値は 4.46、標準偏差は 1.52 であった。健康科学科の平均値は 3.93、標準偏差は 1.85 であった。リハビリテーション学科の平均値は 4.27、標準偏差は 1.49 であった。4 つの平均値の間に有意な差は認められなかった。「人生における目的意識」の得点の社会福祉学科の平均値は 3.78、標準偏差は 1.49 であった。心理科学科の平均値は 3.39、標準偏差は 1.24 であった。健康科学科の平均値は 3.16、標準偏差は 1.27 であった。リハビリテーション学科の平均値は 3.81、標準偏差は 1.26 であった。4 つの平均値の間に有意な差は認められなかった。「寿命観」の得点の社会福祉学科の平均値は 3.67、標準偏差は 1.63 であった。心理科学科の平均値は 3.72、標準偏差は 1.70 であった。健康科学科の平均値は 4.12、標準偏差は 2.05 であった。リハビリテーション学科の平均値は 3.13、標準偏差は 1.73 であった。4 つの平均値の間に有意な差が認められた ( $F(3,233)=2.74, p<.05$ )。続いて、Tukey 法 (Tukey の HSD 法) による多重比較を行ったが有意な差は認められなかった。「死への関心」の得点の社会福祉学科の平均値は 3.28、標準偏差は 1.43 であった。心理科学科の平均値は 3.54、標準偏差は 1.20 であった。健康科学科の平均値は 2.98、標準偏差は 1.70 であった。リハビリテーション学科の平均値は 3.28、標準偏差は 1.44 であった。4 つの平均値の間に有意な差は認められなかった。「愛他行動」の得点の社会福祉学科の平均値は 2.51、標準偏差は 0.54 であった。心理科学科の平均値は 2.49、標準偏差は 0.67 であった。健康科学科の平均値は 2.69、標準偏差は 0.73 であった。リハビリテーション学科の平均値は 2.60、標準偏差は 0.72 であった。4 つの平均値の間に有意な差は認められなかった。

## (2) 相関関係

「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「寿命観」、「死への関心」、「愛他行動」について、学科別の相関関係を分析した。社会福祉学科と心理科学科の相関関係の結果を Table9、健康科学科とリハビリテーション学科の相関関係の結果を Table10 に示した。

「自己有能肯定感」について、社会福祉学科では「自己無能否定感」、「人生における目的意識」と正の相関がみられた。心理科学科では「自己無能否定感」、「人生における目的意識」、「愛他行動」と正の相関がみられた。

「自己無能否定感」について、社会福祉学科では「自己有能肯定感」と正の相関がみられた。心理科学科では「自己有能肯定感」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「愛他行動」と正の相関がみられた。

「死への恐怖・不安」について、社会福祉学科では相関関係はみられなかった。心理科学科では「死からの回避」、「死後の世界観」で正の相関がみられた。

Table9 社会福祉学科と心理科学科の自己肯定感、死生観、愛他行動の相関係数

	自己有能 肯定感	自己無能 否定感	死への恐 怖・不安	死からの 回避	死後の世 界観	人生にお ける目的 意識	寿命観	死への関 心	愛他行動
自己有能 肯定感	1	.44*	.25	-.15	.17	.61**	-.07	.19	.06
自己無能 否定感	.62**	1	.38	.09	.04	.41	.02	-.05	.10
死への恐 怖・不安	.13	.07	1	.35	-.08	-.00	-.12	-.06	-.29
死からの 回避	.11	.07	.64**	1	-.18	.22	.20	.15	-.32
死後の世 界観	.17	.31**	.25*	-.03	1	-.08	.52*	-.04	.25
人生にお ける目的 意識	.53**	.60**	.23	.16	.33**	1	.12	.61**	.06
寿命観	-.05	-.11	.00	-.13	.32**	-.11	1	.32	.31
死への関 心	-.05	-.12	.05	-.12	.41**	-.04	.28*	1	.15
愛他行動	.45**	.30*	.08	-.13	.24*	.09	-.00	.16	1

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$  上部=社会福祉学科 (n=23), 下部=心理科学科 (n=71)

「死からの回避」について、社会福祉学科、心理科学科ともに相関関係はみられなかった。

「死後の世界観」について、社会福祉学科では「寿命観」と正の相関がみられた。心理科学科では「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「人生における目的意識」、「寿命観」、「死への関心」、「愛他行動」と正の相関がみられた。

「人生における目的意識」について、社会福祉学科では「自己有能肯定感」、「死への関心」と正の相関がみられた。心理科学科では「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死後の世界観」と正の相関がみられた。

「寿命観」について、社会福祉学科では「死後の世界観」と正の相関がみられた。心理科学科では「死後の世界観」、「死への関心」と正の相関がみられた。

「死への関心」について、社会福祉学科では「人生における目的意識」と正の相関がみられた。心理科学科では「死後の世界観」、「寿命観」と正の相関がみられた。

「愛他行動」について、社会福祉学科では相関関係はみられなかった。心理

科学科では「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死後の世界観」と正の相関がみられた。

Table10 健康科学科とリハビリテーション学科の自己肯定感、死生観、愛他行動の相関係数

	自己有能肯定感	自己無能否定感	死への恐怖・不安	死からの回避	死後の世界観	人生における目的意識	寿命観	死への関心	愛他行動
自己有能肯定感	1	.70*	-.59	-.47	.11	.39	.22	-.05	-.16
自己無能否定感	.61**	1	-.10	-.48	-.19	.54	.21	.02	.06
死への恐怖・不安	.23**	.25**	1	.14	-.08	.21	-.30	.23	.10
死からの回避	.17*	.17*	.56**	1	.25	.14	-.30	-.08	-.04
死後の世界観	.23**	.16	.37**	.26**	1	-.12	.55	.65*	.32
人生における目的意識	.59**	.47**	.38**	.41**	.39**	1	-.35	-.08	-.42
寿命観	.07	.05	.13	.16	.40**	.12	1	.02	.10
死への関心	-.13	-.07	.24**	.04	.34**	.05	.43**	1	.12
愛他行動	.05	.07	.08	.02	.13	.16	.04	.10	1

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$  上部=健康科学科 (n=11), 下部=リハビリテーション学科 (n=132)

「自己有能肯定感」について、健康科学科では「自己無能否定感」と正の相関がみられた。リハビリテーション学科では「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」と正の相関がみられた。

「自己無能否定感」について、健康科学科では「自己有能肯定感」と正の相関がみられた。リハビリテーション学科では「自己有能肯定感」、「死への恐怖・不安」、「人生における目的意識」と正の相関がみられた。

「死への恐怖・不安」について、健康科学科では相関関係がみられなかった。リハビリテーション学科では「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死から



の回避」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」、「死への関心」と正の相関がみられた。

「死からの回避」について、健康科学科では相関関係がみられなかった。リハビリテーション学科では「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死後の世界観」、「人生における目的意識」と正の相関がみられた。

「死後の世界観」について、健康科学科では「死への関心」と正の相関がみられた。リハビリテーション学科では「自己有能肯定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「人生における目的意識」、「寿命観」、「死への関心」と正の相関がみられた。

「人生における目的意識」について、健康科学科では相関関係はみられなかった。リハビリテーション学科では「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死後の世界観」と正の相関がみられた。

「寿命観」について、健康科学科では相関関係はみられなかった。リハビリテーション学科では「死後の世界観」、「死への関心」と正の相関がみられた。

「死への関心」について、健康科学科では相関関係はみられなかった。リハビリテーション学科では「死への恐怖・不安」、「死後の世界観」、「寿命観」と正の相関がみられた。

「愛他行動」について、健康科学科、リハビリテーション学科ともに相関関係はみられなかった。

## 7. 「死生観」および「自己肯定感」に対する「愛他行動」の影響

死生観の「人生における目的意識」に影響を与えている要因を検討するため、「人生における目的意識」を従属変数、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動」を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った。入江他（2012）を参考に、大学生が目標に挫折しても、何とかして立ち上がるプロセスを簡潔に解釈するために「死生観」因子の中で「寿命観」と「死後の世界観」を除いて行った。

### (1) 全体

「人生における目的意識」を従属変数、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動」を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table11 に示した。

$R^2$  が .45 であり、有意水準 0.1% で有意であった。「自己有能肯定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .41, p < .001$ )。「自己無能否定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .25, p < .001$ )。「死からの回避」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .22, p < .001$ )。「死への関心」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .12, p < .05$ )。

次に「自己有能肯定感」を従属変数、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動」を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table12 に示した。

Table11 全体の「人生における目的意識」における重回帰分析の結果

	$\beta$
自己有能肯定感	.41***
自己無能否定感	.25***
死への恐怖・不安	.04
死からの回避	.22***
死への関心	.12*
愛他行動	-.01
$R^2$	.45***

\* $p < .05$ , \*\*\*  $p < .001$

Table12 全体の「自己有能肯定感」における重回帰分析の結果

	$\beta$
自己無能否定感	.56***
死への恐怖・不安	.07
死からの回避	.02
死への関心	-.05
愛他行動	.08
$R^2$	.36***

\*\*\*  $p < .001$

$R^2$ が.36であり、有意水準0.1%で有意であった。「自己無能否定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .56, p < .001$ )。

また、相関係数の結果と重回帰分析の結果を Figure1 に示した。

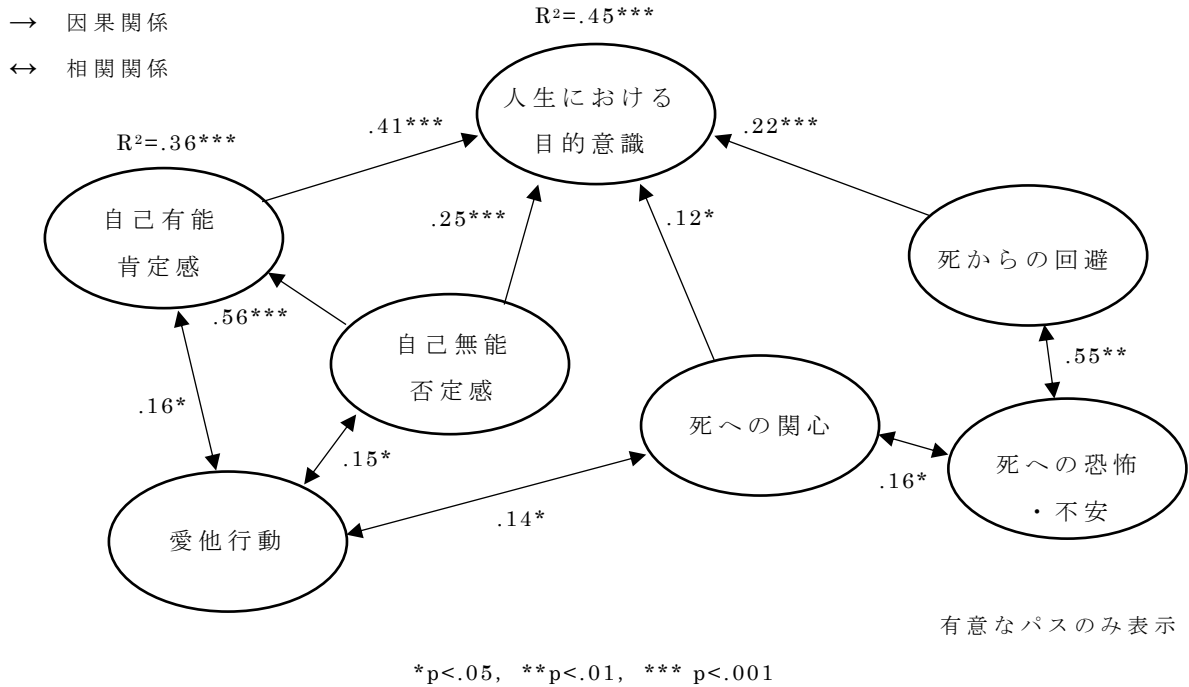


Figure1 全体の相関係数の結果と重回帰分析の結果

(2) 男子

「人生における目的意識」を従属変数、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動」を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table13 に示した。

Table13 男子の「人生における目的意識」における重回帰分析の結果

	$\beta$
自己有能肯定感	.38***
自己無能否定感	.24**
死への恐怖・不安	.04
死からの回避	.31***
死への関心	.23**
愛他行動	.02
$R^2$	.49***

\*\*p<.01, \*\*\* p<.001

$R^2$  が.49 であり、有意水準 0.1% で有意であった。「自己有能肯定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .38, p < .001$ )。「自己無能否定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .24, p < .01$ )。「死からの回避」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .31, p < .001$ )。「死への関心」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .23, p < .01$ )。

次に「自己有能肯定感」を従属変数、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、

「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動」を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table14 に示した。

Table14 男子の「自己有能肯定感」における重回帰分析の結果

	$\beta$
自己無能否定感	.43***
死への恐怖・不安	.16
死からの回避	-.02
死への関心	-.14
愛他行動	.16*
$R^2$	.29***

\* $p < .05$ , \*\*\*  $p < .001$

$R^2$ が.29であり、有意水準 0.1%で有意であった。「自己無能否定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .43, p < .001$ )。「愛他行動」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .16, p < .05$ )。

また、相関係数の結果と重回帰分析の結果を Figure2 に示した。

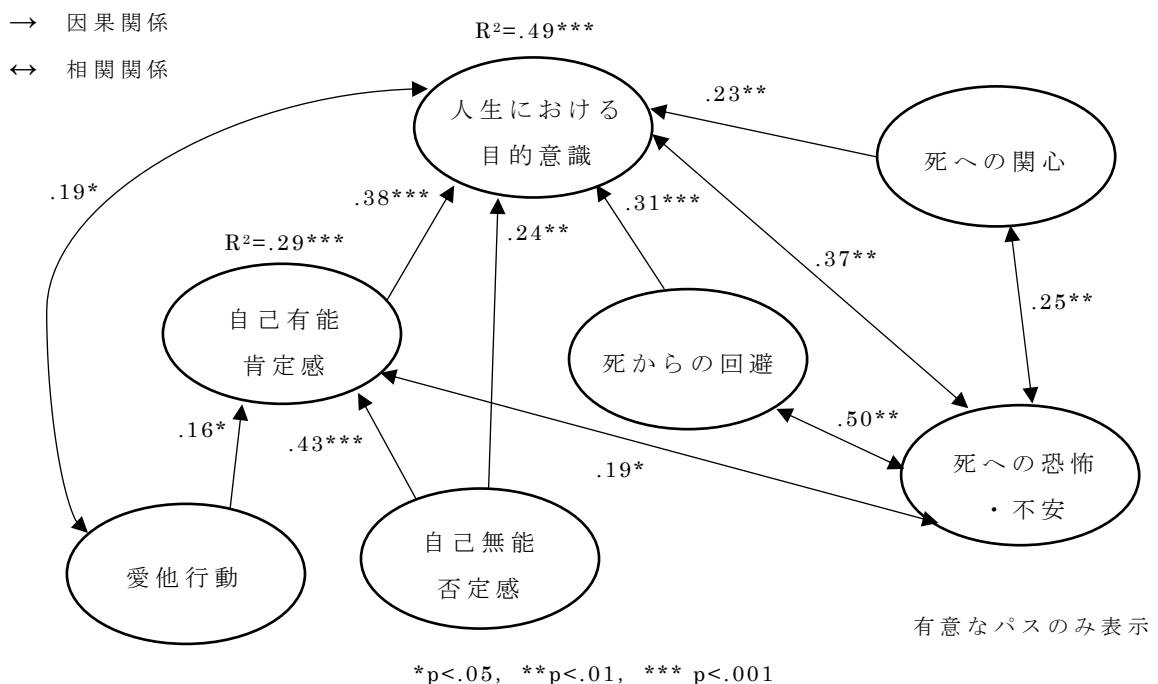


Figure2 男子の相関係数の結果と重回帰分析の結果

### (3) 女子

「人生における目的意識」を従属変数、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動」を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table15 に示した。

Table15 女子の「人生における目的意識」における重回帰分析の結果

	$\beta$
自己有能肯定感	.46***
自己無能否定感	.25*
死への恐怖・不安	.03
死からの回避	.07
死への関心	-.07
愛他行動	-.09
$R^2$	.46***

\* $p < .05$ , \*\*\*  $p < .001$

$R^2$ が.46であり、有意水準 0.1%で有意であった。「自己有能肯定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .46, p < .001$ )。「自己無能否定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .25, p < .05$ )。

次に「自己有能肯定感」を従属変数、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動を」独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table16 に示した。

Table16 女子の「自己有能肯定感」における重回帰分析の結果

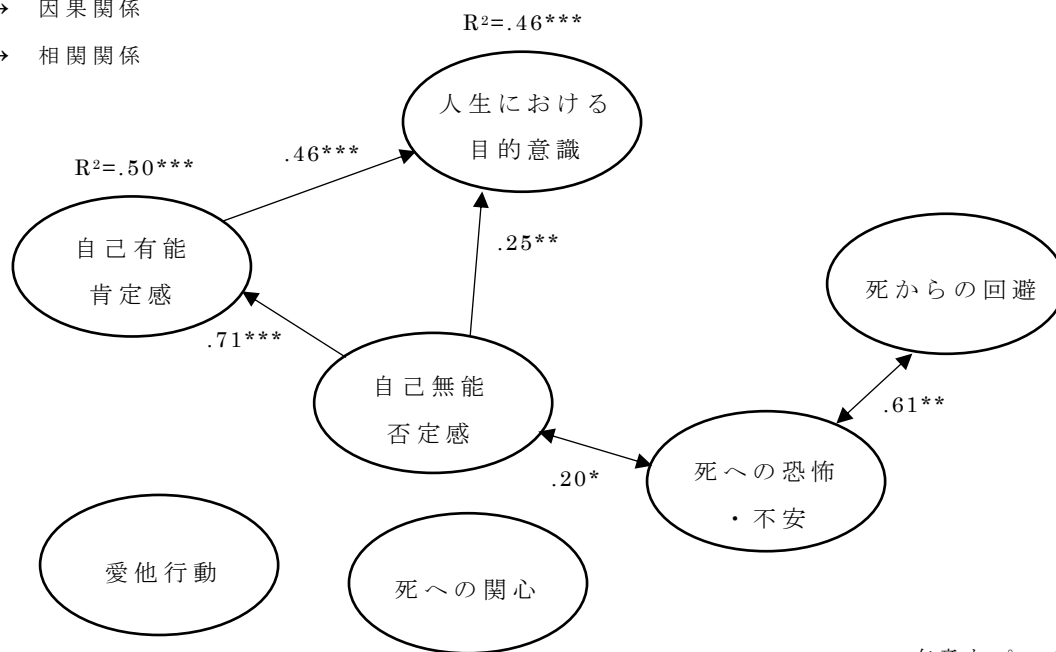
	$\beta$
自己無能否定感	.71***
死への恐怖・不安	-.07
死からの回避	.05
死への関心	.05
愛他行動	.04
$R^2$	.50***

\*\*\*  $p < .001$

$R^2$ が.50であり、有意水準 0.1%で有意であった「自己無能否定感」が正の関連を示した ( $\beta = .71, p < .001$ )。

また、相関係数の結果と重回帰分析の結果を Figure3 に示した。

→ 因果関係  
 ↔ 相関関係



有意なパスのみ表示

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\* p<.001

Figure3 女子の相関係数の結果と重回帰分析の結果

(4) 社会福祉学科

「人生における目的意識」を従属変数、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動」を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table17 に示した。

Table17 社会福祉学科の「人生における目的意識」における重回帰分析の結果

	$\beta$
自己有能肯定感	.50**
自己無能否定感	.36*
死への恐怖・不安	-.38**
死からの回避	.24
死への関心	.54***
愛他行動	-.21
$R^2$	.83***

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\* p<.001

$R^2$  が .83 であり、有意水準 0.1% で有意であった。「自己有能肯定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .50, p < .01$ )。「自己無能否定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .36, p < .05$ )。「死への恐怖・不安」が有意な負の関連を示した ( $\beta = -.38, p < .01$ )。「死への関心」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .54, p < .001$ )。

次に「自己有能肯定感」を従属変数、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、

「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動」を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table18 に示した。

Table18 社会福祉学科の「自己有能肯定感」における重回帰分析の結果

	$\beta$
自己無能否定感	.43
死への恐怖・不安	.18
死からの回避	-.34
死への関心	.31
愛他行動	-.14
$R^2$	.33

いずれも有意ではなかった。

また、相関係数の結果と重回帰分析の結果を Figure4 に示した。

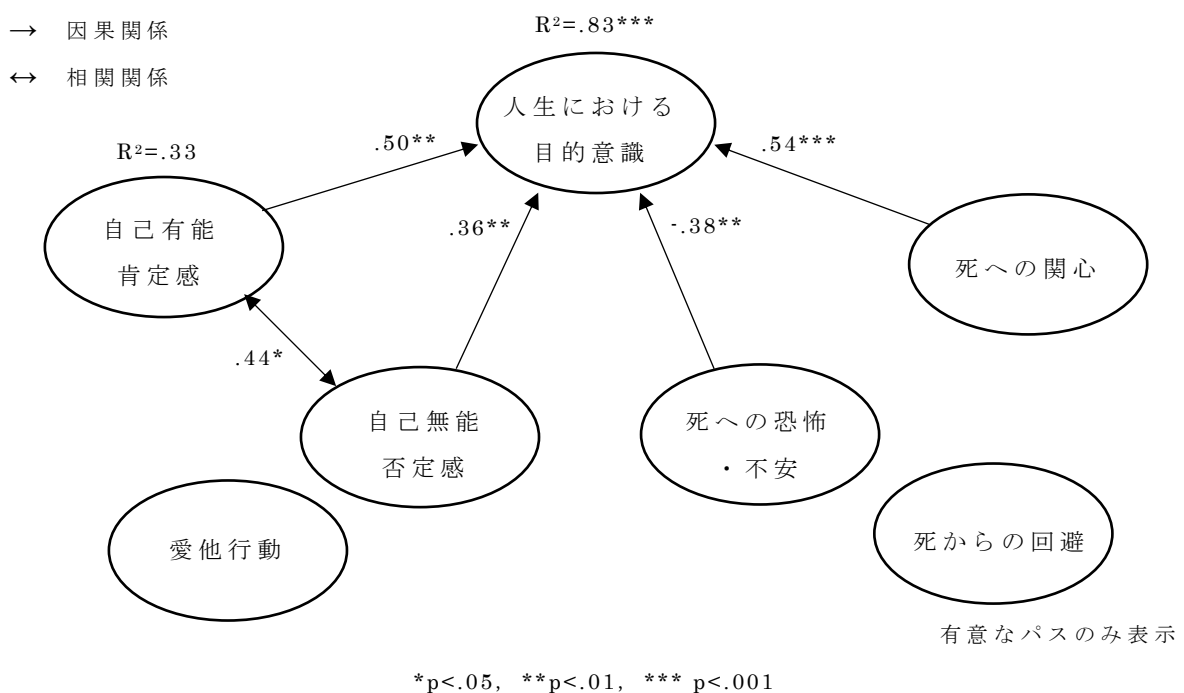


Figure4 社会福祉学科の相関係数の結果と重回帰分析の結果

### (5) 心理科学科

「人生における目的意識」を従属変数、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動」を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table19 に示した。

$R^2$  が .47 であり、有意水準 0.1% で有意であった。「自己有能肯定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .34, p < .01$ )。「自己無能否定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .455, p < .001$ )。「愛他行動」が有意な負の関連を示した ( $\beta$

=-.24,p<.05)。

Table19 心理科学科の「人生における目的意識」における重回帰分析の結果

	$\beta$
自己有能肯定感	.34**
自己無能否定感	.46***
死への恐怖・不安	.22
死からの回避	-.08
死への関心	.06
愛他行動	-.24*
R <sup>2</sup>	.47***

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\* p<.001

次に「自己有能肯定感」を従属変数、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動を」独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table20 に示した。

Table20 心理科学科の「自己有能肯定感」における重回帰分析の結果

	$\beta$
自己無能否定感	.51***
死への恐怖・不安	.01
死からの回避	.10
死への関心	-.03
愛他行動	.31**
R <sup>2</sup>	.47***

\*\*p<.01, \*\*\* p<.001

R<sup>2</sup>が.47であり、有意水準 0.1%で有意であった。「自己無能否定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta =.51,p<.001$ )。「愛他行動」が有意な正の関連を示した ( $\beta =.31,p<.01$ )。

また、相関係数の結果と重回帰分析の結果を Figure5 に示した。



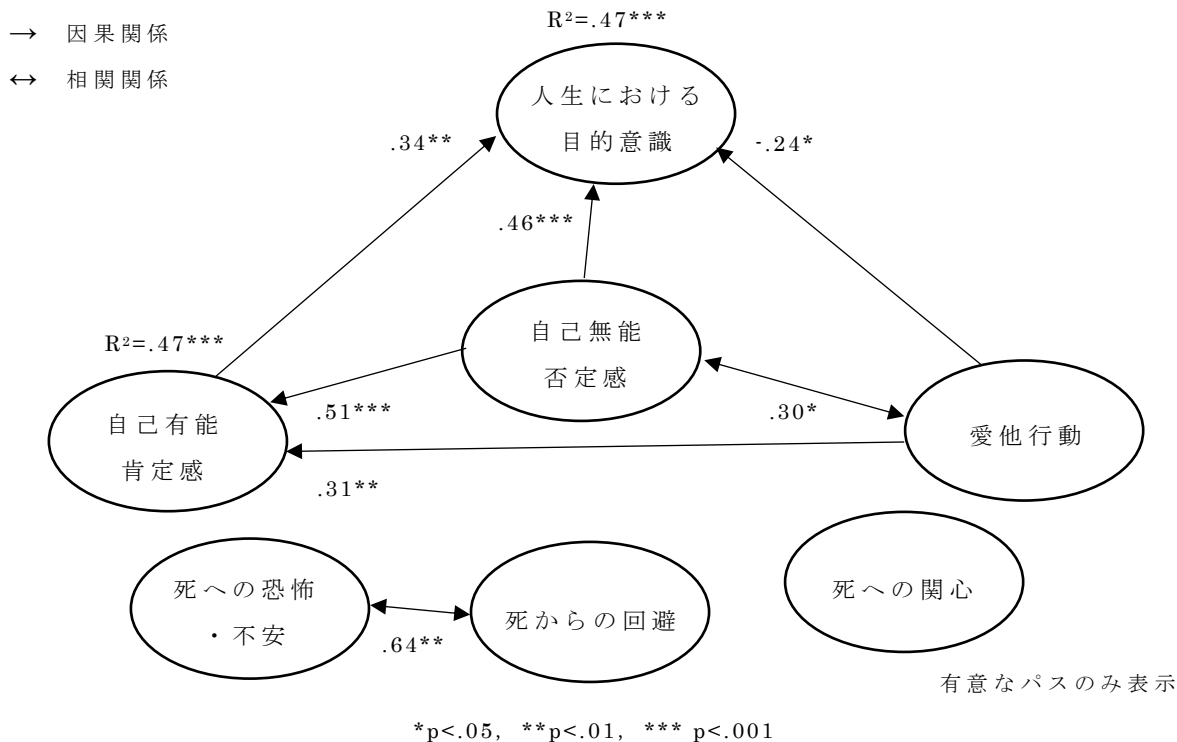


Figure5 心理科学科の相関係数の結果と重回帰分析の結果

(6) 健康科学科

「人生における目的意識」を従属変数、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動」を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table21 に示した。

Table21 健康科学科の「人生における目的意識」における重回帰分析の結果

	$\beta$
自己有能肯定感	.52
自己無能否定感	.51
死への恐怖・不安	.51
死からの回避	.55
死への関心	.05
愛他行動	-.41
$R^2$	.83

いずれも有意ではなかった。

次に「自己有能肯定感」を従属変数、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動」を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table22 に示した。

Table22 健康科学科の「自己有能肯定感」における重回帰分析の結果

	$\beta$
自己無能否定感	.61*
死への恐怖・不安	-.53*
死からの回避	-.09
死への関心	.17
愛他行動	-.23
$R^2$	.81

\* $p < .05$

$R^2$ が.81であるが有意ではなかった。「自己無能否定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .61, p < .05$ )。「死への恐怖・不安」が有意な負の関連を示した ( $\beta = -.53, p < .05$ )。

また、相関係数の結果と重回帰分析の結果を Figure6 に示した。

→ 因果関係

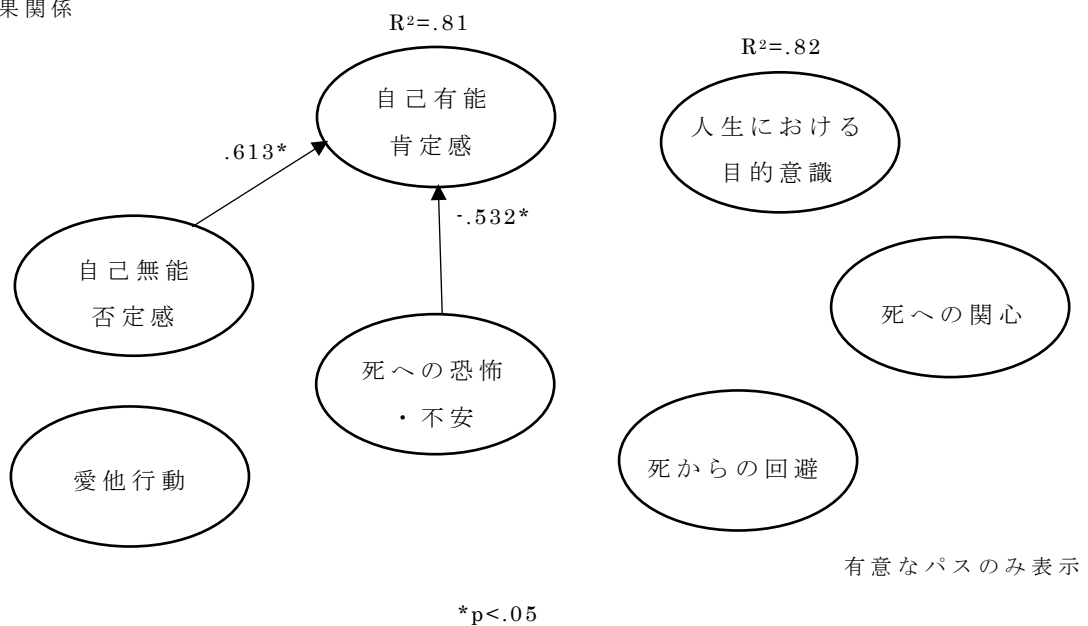


Figure6 健康科学科の相関係数の結果と重回帰分析の結果

### (7) リハビリテーション学科

「人生における目的意識」を従属変数、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動」を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table23 に示した。

$R^2$ が.48であり、有意水準 0.1%で有意であった。「自己有能肯定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .46, p < .001$ )。「死からの回避」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .26, p < .01$ )。

**Table23** リハビリテーション学科の「人生における目的意識」における重回帰分析の結果

	$\beta$
自己有能肯定感	.46***
自己無能否定感	.13
死への恐怖・不安	.07
死からの回避	.26**
死への関心	.08
愛他行動	.10
$R^2$	.48***

\*\* $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

次に「自己有能肯定感」を従属変数、「自己無能否定感」、「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「死への関心」、「愛他行動を」独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行った結果を Table24 に示した。

**Table24** リハビリテーション学科の「自己有能肯定感」における重回帰分析の結果

	$\beta$
自己無能否定感	.57***
死への恐怖・不安	.10
死からの回避	.02
死への関心	-.12
愛他行動	.012
$R^2$	.39***

\*\*\*  $p < .001$

$R^2$  が .39 であり、有意水準 0.1% で有意であった。「自己無能否定感」が有意な正の関連を示した ( $\beta = .57, p < .001$ )。

また、相関係数の結果と重回帰分析の結果を Figure7 に示した。

→ 因果関係  
 ↔ 相関関係

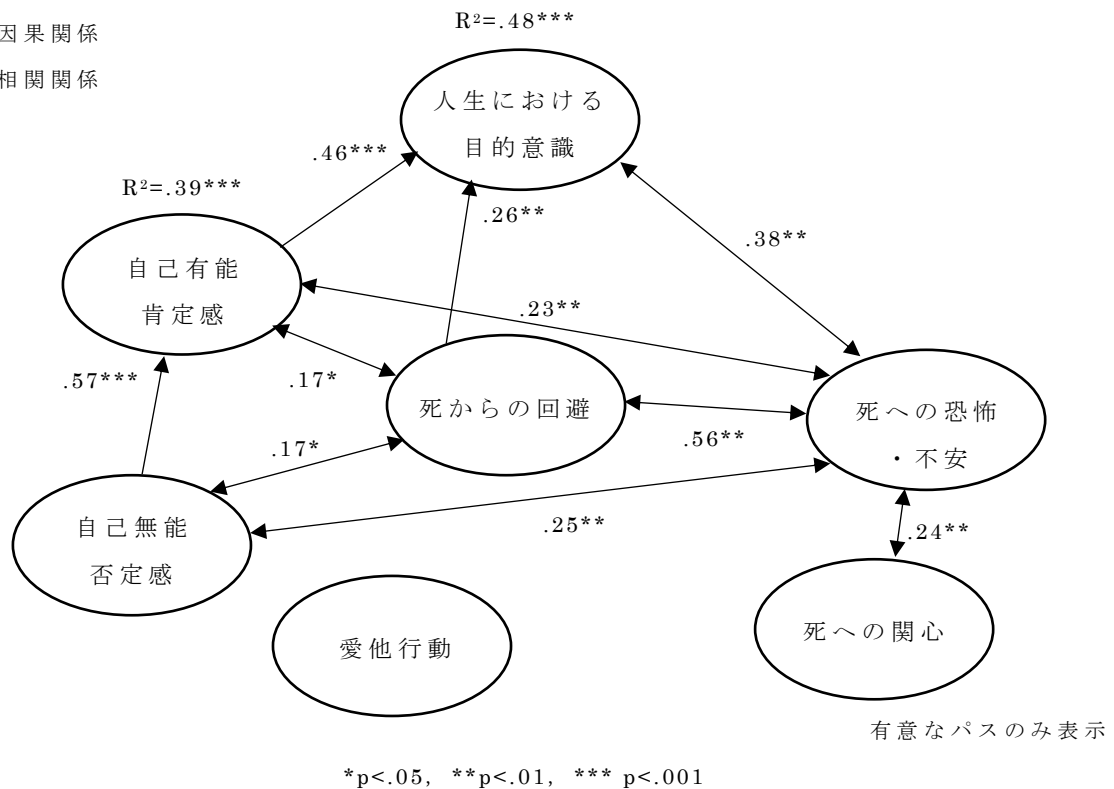


Figure7 リハビリテーション学科の相関係数の結果と重回帰分析の結果

#### IV. 考察

本研究では、大学生の死生観及び自己肯定感に関して、愛他行動がどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とした。

全体では、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への関心」、「死からの回避」が「人生における目的意識」に正の影響を与えていた。また、「自己無能否定感」が「自己有能肯定感」に正の影響を与えていた。「愛他行動」との因果関係はみられなかったが、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への関心」との間に弱い正の相関がみられた。

「自己無能否定感」が「自己有能肯定感」を高め、「人生における目的意識」を高めるパターンと、「自己無能否定感」が「人生における目的意識」を高めるパターンがあった。「自己無能否定感」とは“自分はだめなんかじゃない”という意味であり、自己有能肯定感の二重否定である(入江他, 2012)。つまり、“自分はだめなんかじゃない”という気持ちが“自分はできる”という気持ちになり、それが「人生における目的意識」を高めるパターンと、“自分はだめなんかじゃない”という気持ちをバネに、「人生における目的意識」を高めるパターンがあると言える。他に「人生における目的意識」を高める要因は、「死への関心」と「死からの回避」であり、仮説④は支持されなかったが仮説②は部分的に支持された。死について考える「死への関心」が高まることで「人生における目的意識」を高めている理由として、普段から死について考え、死を身近に感じ

ていると“後悔したくない”という気持ちになり、自分の人生に目的や使命を見出すことができるからではないかと考えられる。死について考えることを避けたいという「死からの回避」が高まることで、「人生における目的意識」を高めている理由として、一度挫折したことで気持ちが落ち込み、死について考えたがそれを避け“もう一度頑張ろう”という気持ちになり、新たに目標を定めるからではないかと考えられる。

男子では、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死からの回避」、「死への関心」が「人生における目的意識」に正の影響を与えていた。また、「愛他行動」と「自己無能否定感」が「自己有能肯定感」に正の影響を与えていた。男子では「愛他行動」を行うことで「自己有能肯定感」が高まり、「人生における目的意識」を高めていた。よって、仮説①が支持された。

女子では、「自己有能肯定感」と「自己無能否定感」が「人生における目的意識」に正の影響を与えていた。また、「自己無能否定感」が「自己有能肯定感」に正の影響を与えていた。女子では「自己有能肯定感」や「自己無能否定感」が高まることで「人生における目的意識」を高めており、仮説①が部分的に支持された。「自己有能肯定感」を高める要因に「自己無能否定感」は含まれたが「愛他行動」は含まれなかった。また、「愛他行動」と相関関係にあるものはなかったことから、女子は「愛他行動」が「自己肯定感」や「人生における目的意識」に影響を与えていなかった。その理由として、植村（1999）が“困ったな”、“どうしよう”という不快感情が喚起する場合は、向社会的行動の意図は形成されにくい」と述べているように、女子は行動に移す前に“余計なお世話だったらどうしよう”という不安があり、なかなか行動に移すことができない場合があるのではないかと考えられる。また、不安に思いつつ愛他行動を行い、相手からポジティブな反応が返ってきたとしても、愛他行動を行う前の不安が解消されて安心はするが、自己肯定感が高まるほどのポジティブな感情ではないのではないかと考えられる。また、“他の人が何とかしてくれるだろう”と考え、見てみぬふりをする場合もあるのではないかと考えられる。そのため、「愛他行動」が「自己肯定感」や「人生における目的意識」に影響を与えないのではないかと考えられる。

社会福祉学科では、「自己有能肯定感」、「自己無能否定感」、「死への関心」が「人生における目的意識」に正の影響を与えており、「死への恐怖・不安」が「人生における目的意識」に負の影響を与えていた。よって、仮説③と仮説①が部分的に支持され、仮説④は支持されなかった。自分の死について考えると不安になる、死は怖いものだという「死への恐怖・不安」が高まることで「人生における目的意識」を低下させる理由として、「死への関心」とは逆に、死を身近に感じると恐怖や不安でいっぱいになってしまい、自分の人生の目的や使命を見失い、未来について明るい方向に考えることができなくなってしまうからではないかと考えられる。また、社会福祉学科でも「愛他行動」と相関関係にあるものはなく、「愛他行動」が「自己肯定感」や「人生における目的意識」に影響

響を与えていなかった。その理由として、社会福祉学科は学外での実習で患者と接する機会もあり、愛他行動をすることは当たり前のことであることが考えられる。そのため、「愛他行動」が「自己肯定感」や「人生における目的意識」に影響を与えないのではないかと考えられる。

心理科学科では、「自己有能肯定感」と「自己無能否定感」が「人生における目的意識」に正の影響を与えていた。また、「愛他行動」が「人生における目的意識」に負の影響を与えていた。心理科学科では「愛他行動」を行うことで「自己有能肯定感」が高まり、「人生における目的意識」を高めており、仮説①が支持された。しかしその一方で、「愛他行動」を行うことで「人生における目的意識」が低下する場合があることが分かった。その理由として、心理科学科の学生は「人生における目的意識」を「愛他行動」に見出しているのではないかと考えられる。菊池（2014）によると、「自信をとりもどしたり自分の能力をためたりするために思いやりのある行動がとられることがある」と述べており、心理科学科はこの内的報酬が目的で「愛他行動」を行っているのではないかと考えられる。また、菊池（2014）は「内的報酬が目的で行動がされても、それを思いやり行動と呼ぶことにはさしつかえがない」と述べている。「愛他行動」を行ったが、相手からネガティブな反応が返ってきたとき、自分の人生の意義や目的を見失ってしまうほどひどく落ち込んでしまうのではないかと考えられる。菊池（1998）は、向社会的行動をした側と向社会的行動をされた側とで受けとめ方が違ったりすることがあると述べている。例えば、電車の中でお年寄りに席をゆずったとしても、“大丈夫ですから”や“すぐ降りますから”と優しく断られた場合は、宮崎（2013）の研究結果のように、「小さな親切大きなお世話」（愛他行動－不都合な結果）であっても、愛他行動をされた側はポジティブな感情であり、愛他行動をした側もおそらく“断られたけど、勇気を出して良かった”と、ポジティブな感情であると考えられる。反対に「年寄り扱いするな」と厳しく断られた場合には、愛他行動をされた側は“大きなお世話だ”と怒り、愛他行動をした側は“勇気を出したのに怒られた”や“周りの人も見ているし恥ずかしい”と、お互いにネガティブな感情であると考えられる。また、菊池（2014）は、「恥」の感情を体験するものは向社会的には行動しない可能性があるとしており、この「恥」の感情を体験したことで、「愛他行動」を行いにくくなり、自分の人生の意義や目的を見失うのではないかと考えられる。心理科学科が「愛他行動」を行うことで「人生における目的意識」が低下する理由には、以上のようなことが考えられる。

健康科学科では、「自己無能否定感」が「自己有能肯定感」に正の影響を与え、「死への恐怖・不安」が「自己有能肯定感」に負の影響を与えていたが、 $R^2$ が有意とならず、「自己肯定感」や「人生における目的意識」を高める要因を十分に説明することができなかった。その理由として、健康科学科の学生が11名と、心理科学科やリハビリテーション学科と比べても圧倒的に人数が少なかったことがあげられる。

リハビリテーション学科では、「自己有能肯定感」と「死からの回避」が「人生における目的意識」に正の影響を与えていた。また、「自己無能否定感」が「自己有能肯定感」に正の影響を与えていた。よって、仮説①と②が部分的に支持された。また、リハビリテーション学科でも「愛他行動」と相関関係にあるものではなく、「愛他行動」が「自己肯定感」や「人生における目的意識」に影響を与えていなかった。その理由として、リハビリテーション学科は理学療法士、作業療法士、言語聴覚士といった対人援助職を目指す学生が多く、「愛他行動」を行うことは当たり前のことであると考えられ、「愛他行動」が「自己肯定感」や「人生における目的意識」に影響を与えないのではないかと考えられる。

以上のことから、男子と心理科学科は「愛他行動」が「自己肯定感」や「人生における目的意識」に影響を与えていたが、女子と社会福祉学科、リハビリテーション学科は、「愛他行動」が「自己肯定感」や「人生における目的意識」に影響を与えていなかった。本研究では、「愛他行動」と「死生観」及び「自己肯定感」の関係について性差がみられ、学科ごとに異なる結果が得られたが、大学生においては、必ずしも「愛他行動」が「死生観」及び「自己肯定感」に影響を与えているとは限らないということが明らかになった。

## V. 引用文献

赤澤 正人 (2010) 若年者の自殺関連行動と死生観に関する研究 日本死の臨床研究会

海老 根理恵 (2008) 死生観に関する研究の概観と展望 東京大学大学院教育学研究科紀要 48,193-202

藤井 美和 (2003) 大学生のもつ「死」のイメージ：テキストマイニングによる分析 関西学院大学社会学部紀要 95,145-155

平井 啓・坂口 幸弘・安部 幸志・森川 優子・柏木 哲夫 (2000) 死生観に関する研究 臨床の死 23(1):71-76

伊藤 花奈・宮崎 圭子 (2012) 愛他行動が人に与える影響 日本心理臨床学会 第31回大会発表論文集 690

入江 和夫・岳田 衣実・古賀 淳子・藤村 麻衣 (2012) 研究論叢 第3部 芸術・体育・教育・心理 62, 7-17, 2012

菊池 章夫 (1988) 思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル 川島書店

菊池 章夫 (1998) また／思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル 川島書店

菊池 章夫 (2014) さらに／思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル 川島書店

警察庁 (2018) 平成 30 年中における自殺の状況 [https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/H30/H30\\_jisatunojoukyou.pdf](https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/H30/H30_jisatunojoukyou.pdf)

宮崎 圭子 (2013) 愛他行動が受益者に与える影響—ポジティブイメージを

中心に一 日本心理学会 第77回大会発表論文集 849

村上 達也・西村 多久磨・櫻井 茂男 (2016) 家族, 友達, 見知らぬ人に対する向社会的行動—対象別向社会的行動尺度の作成— 教育心理学研究 64,156-169

二宮 克美 (2004) キーワード・コレクション 発達心理学 [改訂版] 子安 増生・二宮 克美 (編) 新曜社

日本財団 (2018) 日本財団いのち支える自殺対策プロジェクト『第3回自殺意識調査』報告書 [https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/03/wha\\_pro\\_sui\\_mea\\_11-1.pdf](https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/03/wha_pro_sui_mea_11-1.pdf)

大石 和男・安川 通雄・濁川 孝志・飯田 史彦 (2007) 大学生における生きがい感と死生観の関係—PIL テストと死生観の関連性— 健康心理学研究 Vol.20, No.2

高坂 茉里 (2012) 大学生の対人関係と学校ストレス—1年生と3年生を対象とした調査研究— 暁星論叢 第62号 55-84

田中 道弘 (2005) 自己肯定感尺度の作成と項目の検討 人間科学論究 13,15-27

豊田 加奈子・松本 恒之 (2004) 大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究 東洋大学人間科学総合研究所紀要 創刊号 38-54

植村 里絵 (1999) 向社会的行動の生起過程に関する探索的研究 名古屋大学教育学部紀要 46,173-185,